OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ハインツ・アルトシュールの口述回想「記憶を刻みながら」①
Author(s)	中村, 綾乃
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 27-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/54547
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ハインツ・アルトシュールの口述回想「記憶を刻みながら」①

中村綾乃（訳）

1 日本語訳に寄せて—ドイツ商人と神戸

神戸の港に面した旧居留地から山の手に向かう坂道は、トアロードと呼ばれている。この坂を上りきったところに、かつてトアホテルがあった。このホテルの名称は、ドイツ語の門「トア」（Tor）という意味の単語に由来する。トアホテルの跡地に建てられたのが、外国人倶楽部である。この界隈には、戦前まで在外公館、外国人の邸宅や社交クラブがあった。いくつかの邸宅は、「異人館」という名の博物館となり、当時の外国人の暮らしぶりを伝えている。神戸を訪れる外国人観光客の中には、戦前までこのような「異人館」の住人であったという人も少なくない。現在、米国アリゾナ州に暮らすディーター・ロベルト・アルトシュール氏もその一人である。2006年9月、同氏は60年ぶりに来日し、子供時代を過ごした神戸の街を散策した。当時、大学院生であった私は、同氏とともに北野町のドイツ人クラブのクラブ・コンコルディアや学校の跡地を訪ね、神戸での思い出を聞かせていただいた。「ハイキュウ（配給）」、「クウシュウケイホウ（空襲警報）」、「アマ（阿媽）さん」[1]といった言葉とともに、当時の記憶が蘇ってくるようであった。

同氏は、1933年10月にドイツのドレスデンで生まれ、生後6ヶ月の時に母親に連れられて来神した。父親のハインツ・アルトシュール氏は、一足先に米国経由で来日し、母子を迎え入れる準備をしていた。ヒトラーの権力掌握から1年、時代の不穏な空気を感じとったハインツは、故郷を離れ、家族とともに神戸で暮らすことを決めた。彼は、結婚前の1926年から1929年までの間、神戸のヴィンクラー商会に勤めており、この時の経験が買われ、同じ雇用主から招かれたのである。しかしアルトシュール一家にとって、神戸も安住の地とはならなかった。1933年以降、東京と横浜、神戸のドイツ人社会において、それぞれナチ党京浜、阪神支部と党関連団体が組織され、ナチ化が推進された[2]。ハインツは、プロテスタントの洗礼を受けていたものの、ナチ時代の法律によって「非アーリア人」、すなわちユダヤ人とされた。雇用主の神戸のヴィンクラー商会は、ナチ党阪神支部の圧力を受け、まず彼の勤務時間を削減し、閑職へと追いやり、とうとう解雇を申し渡した。ハインツが神戸のドイツ領事館に呼ばれたのも同じ頃である。パスポートには、イスラエルという名前とユダヤ人をあらわす「J（=Juden）」を刻印され、ドイツ市民権の喪失を宣告されたのであった。

1942年に入り、ハインツの元に両親の悲報が届く。ハインツの両親は、1942年の復活祭の祝日、「ユダヤの家」と呼ばれたドレスデンのゲットーの自室で心中を遂げた。ゲシュタポによる家宅捜査を受け、出頭を命じられた後、二人は劇薬ヴェロナールを服用したのである。絶

---

[1] 外国人家庭で働いていた家政婦を指しており、「おばあさん」を指す台湾語の阿媽という呼称に由来する。

[2] 日本のドイツ人社会とナチズムの関係については、中村綾乃「東アジアの在留ドイツ人社会とナチズム」工藤章・田嶋信雄編『日独関係史』（東京大学出版会、2008年）、同『東京のハーケンクロイツ』（白水社、2009年）を参照。

滅収容所行きを意味した「東への移送」が迫っていることを察したと思われる。『第三帝国の言語』で知られる言語学者ヴィクトール・クレンペラーもまた、同時期にドレスデンのこの「ユダヤの家」に収監されていた。戦後まもなく公刊されたクレンペラーの日記には、ハインツの両親と思われる老夫婦が自殺したことが記されている。クレンペラーの日記の日付は、1942年4月5日となっており、「初めて春めいた陽気となった」その日、自殺者はハインツの両親を含めて4人を数えた[3]。母親の方が先に息をひきとり、それを見届けた父親も搬送された診療所でまもなく亡くなった。両親の命日は復活祭の祝日であったこと、その最期の様子を神戸にいた一家は、スイスの知人を通じて知らされたという。

1945年8月6日の神戸空襲によって、ハインツの一家は着の身着のまま焼け出されたものの、無事に8月15日の終戦を迎えた。アメリカの移民割当ビザを取得し、シアトルに向かい、その後ニューヨークに居を定める。1972年にハインツは退職し、夫婦でサンディエゴに移り住み、1991年に88歳で亡くなった。亡くなる2年前から、口述回想という形で、ドレスデン、神戸、そしてアメリカに渡るまでの自らの経験を記した。アメリカに移り住んで以来、アルトシュール一家は、母語のドイツ語ではなく、主として英語を話すようになり、この回想録でも英語が用いられている。1989年に他界されたために、同氏に会うことは叶わなかったが、息子のディーター・ロベルト・アルトシュール氏から、複製していただいたテープと書き起こし原稿、書簡や日記などの個人史料を提供していただいた。同氏によって書き起こされた原稿は、ニコラ・ヘルヴェック、トーマス・ペーカー、クリスチャン・シュパングによるドイツ語の解説が加わり、上梓された[4]。パスポートと免許証、家族や友人と交わした手紙、写真や日記など、一家の神戸での暮らしを物語る史料は、神戸の市立博物館とドイツ東洋文化研究協会に所蔵されている。

このハインツ・アルトシュールの口述回想は、90分のオーディオカセット3巻分の分量となる。同氏の手によって、*As I record these memories*（記憶を刻みながら）という主題が付されており、さらに内容ごとに「日本（1926年から1929年まで）とドイツ（1930年から1934年まで）」、「1934年から1941年までの日本―第二次世界大戦への道」、「戦時下の日本（1941年から1945年まで）」という三つの見出しが置かれている。回想の前半部分では、1926年から29年までの独身時代を過ごした神戸での日々が語られる。神戸のドイツ商人の中には、第一次大戦時に青島から捕虜として送還された経験を持つ者が多くいたことなど、ドイツ人社会を構成した人々の顔ぶれも明らかになる。後半部分に入ると、戦争の影響が色濃く影を落とし始める。足繁く通っていたクラブ・コンコルディアで仲間外れにされた、親しかった友人に挨拶をしても無視されたといった話からは、ナチ党支部および党員の影響もうかがえる。ハインツの証言から、神戸のドイツ人社会のナチ化は、そのイデオロギーの受容によってではなく、日常的で社会的、非政治的な経路を通じて、また具体的な人間関係や利害関係、共同体的な結

---

[3] Victor Klemperer, *Ich will Zeugnis ablegen bis zum letzten: Tagebücher 1933-1945*, Berlin: Aufbau-Verlag, 1998, S. 60.

[4] Nikola Herweg / Thomas Pekar / Christian W. Spang (Hg.), *Heinz Altschul: As I record these memories... “ Erinnerungen eines deutschen Kaufmanns in Kobe (1926-29, 1934-46)*, Tokyo: OAG-Tokyo, 2014.

束とそこへの帰属意識と結びつきながら、可能となったことがわかる。また、憲兵隊とのやりとりなどから垣間見ることのできる日本人との関係も興味深い。日本の官憲には、同盟国の一員であるドイツ人として見られていた一方、そのドイツ人の社会から「ユダヤ人」として排斥されていたという彼の経験は、日本とドイツの同盟関係の矛盾や懸隔を物語るものでもある。

以下の拙訳は、このハインツ・アルトシュール氏の口述回想を日本語に訳したものである。日本で迎えた終戦から占領期、一家がアメリカに渡るまでの日々を語る下りで、同氏は亡くなったため、回想録としては未完となっている。記憶の曖昧さ、話が前後、重複する部分があることも否めないが、このような語り手の記憶の構成もまた、分析の対象となろう。

2　日本（1926 年から 1929 年まで）、ドイツ（1930 年から 1934 年まで）

私は、生まれも育ちもドイツのドレスデンです。ドレスデンは、ヨーロッパでも指折りの風光明媚の都市でしたが、戦時中の 1945 年 2 月 13 日と 14 日、降り注ぐ爆弾によって市街地はことごとく破壊されました。空襲はドイツ全土におよびましたが、この二度におよぶドレスデンへの爆撃は壊滅的な被害をもたらし、10 万人以上の人々が犠牲となったのです。

若い時分、ドレスデン漕艇協会に入っていて、その協会のスキー部の一員でもありました。夏の訪れとともにほぼ毎週末、エルベ川でボートを漕ぐために出掛けました。冬はドレスデンを離れ、我々スキー部の山荘があったエルツ山地に出向き、スキーに興じました。水面でも、山の斜面でも満喫しました。

ドレスデンの主要産業といえば、たばことカメラ、それに婦人用の帽子でした。ドレスデンにあった婦人用帽子の工場の数は、郊外にあったものを含めて百を下らなかったでしょう。私の父は、帽子の素材をつくる工場を所有していて、イタリアやスイス、中国や日本から原材料を輸入し、それを工場で組紐にして出荷していたのです。父の工場で製造されていた帽子の素材は、藁や麻の紐がほとんどでした。1925 年末、ヴィンクラー商会の取引業者が商用でドレスデンを訪れました。ヴィンクラー商会はハンブルクに本店を構え、日本にも支社がありました。この取引業者がドレスデンにいる機会を捉え、父は息子の、つまり私の働き口ということですが、日本支社で見つけられないかと掛け合いました。ドレスデンのホテルで、ダンクヴェルト氏は私を面接した後、来週中にも日本へ行く予定であるので、私にふさわしい仕事があるかどうか聞いてみると言ってくれました。1926 年に入り、ほどなくしてヴィンクラー商会神戸支店の組み紐の取り扱い部門で仕事があるという連絡が舞い込んできたのです。しかも、すぐにでも私に来て欲しいとのことでした。当時、シベリア鉄道を使えば 2 週間程度で日本まで行くことができ、先方もシベリア経由で来日するようにとのことでしたが、私は別の経路で行こうと思っていました。というのも、かねてよりインド洋を経由し、南洋の見知らぬ国々を渡る船旅に夢を馳せていたのです。とうとうヴィンクラー商会は折れて、船での日本行きを了承してくれました。次に出航する便で予約可能だった船がＳＳ・トリアー号でした。西ドイツの中世都市に因んだ名前の客船でした。トリアー号は、1926 年 2 月半ばの出航予定だったので、商用でスイスに行く父とともに、まずスイスへ向かいました。スイスから、一人で鉄道を使ってアルプスを越え、ジェノヴァに向かいました。ＳＳ・トリアー号は、石炭を燃料とする古いタイプ

の蒸気船で、貨物船に近いものでしたが、ファーストクラスとツーリストクラスの客室が備わっていました。私は、船尾のツーリストクラスを確保しました。左舷のこの船室は、プロペラのちょうど上にあり、唯一残っていた最後の一室だったのではないかと思います。

船のリズミカルな振動と揺れに慣れるまでに数日かかりましたが、すぐに落ち着きました。何と素晴らしい船旅だったことか。乗客は若い人から年配の人まで幅広く、上海で要職に就くような人もいました。女性の中には、夫がオランダ領インドでゴムのプランテーション経営に携わっており、ヨーロッパで休暇を過ごしたという帰省客もいました。ある年配のドイツ人教授は妻を同伴していましたが、日本の名古屋へ行き、そこにある大学で教鞭をとることになっていました。彼は何とかして日本語を学ぼうとしていて、私を誘いたがっていました。しかし私は、日本語を覚えることよりも、他のことに目が向いていたのでしょう。中には、四六時中食べている乗客もいましたが。私も若かったので、三食しっかりと胃におさめることができました。

ジェノヴァを出航した後、シチリア島とエトナ山を通過し、最初の停泊地であるポートサイードに着きました。ポートサイードに降り立ち、とても有名なデパートであるサイモン・アルツト（Simon Arzt）で買い物をし、時間を潰しました。このデパートで、ヘルメット型の防暑帽を手に入れました。リヴィングストン博士さながらのこの帽子は、旅の必需品のように思えたのです。そこからスエズ運河を通りました。ここでもドイツ製のボックスカメラにたくさんの写真を収めましたが、惜しいことに、後々の日本でカメラも写真も灰になってしまいました。スエズ運河を渡った後の最初の停泊地は、紅海の遠端にあるペリム島で、アデンからさほど離れてはいないところにあります。私たちの船は、ここで石炭を積むために停泊したのです。地球上で地獄といえる場所を挙げろと言われるならば、このペリム島ではないでしょうか。草一本生えておらず、木もなければ茂みもない、ただただ暑く、見渡す限り赤い石と砂なのです。炭塵がいずれの客室に入り込まないようにするため、小さなのぞき窓は隙間なく閉められ、石炭が積まれていきました。波止場の通路では、惨めな風貌の黒人の男性、女性や子供が籠を抱えて列をなし、次々と石炭を舟の貯蔵庫に積み込んでいくのです。そして空になった籠を、もう一方の列に戻していくのです。この一連の作業が数時間続きました。冒険心から、私はデッキに出てみましたが、それから10分もしない間に、石炭を積んでいる人々と見分けがつかないほど全身が真っ黒になりました。数時間してようやく、船は出航しましたが、艦内が新鮮な空気で満たされ、さらにデッキ中の数インチの炭塵がきれいになったのは、ずいぶん時間がたってからのことです。それからしばらくすると、ついにインド洋が視界全体に飛び込んできました。眩いばかりの青でした。甲板に出て、真下に広がる海面を覗き込んだり、数日間にわたって船に沿って戯れていたイルカや船首の一歩手前で、長距離を滑空するトビウオの群れを見たりしているうちに一日が暮れていきました。これほど素晴らしい船旅は、後にも先にもありませんでした。

次なる停泊地は、セイロン島のコロンボでした。現在の国名は、スリランカです。他の乗客とともに船から降り、車でマウントラビニアホテルという豪華なホテルに行き、ここで南国の楽園を満喫しました。その後、オランダ領インドとシンガポールで停まりました。シンガポー

ルを出航すると、次なる停泊地は香港と上海です。大方の乗客は上海までで降りてしまい、日本までの航海をともにしたのは数えるほどです。まず長崎の対岸にある茂木で停まり、そこからサンパンに乗り、陸地に向かいました。高台にある寺院を訪れると、湾が一望でき、私たちの船も見えました。見るものすべてが初めてでしたが、この国は非の打ち所がないほど美しく、静かで心地よかったのです。人々の振る舞いも礼儀正しいものでした。香港やシンガポールのスラム街の喧騒から一転、松の大木の下にある荘厳な寺院を拝むことができ、感無量でした。私の乗った船は、1926年4月7日の朝に神戸に着くはずでした。しかし目的地を目前にした瀬戸内海の真ん中で、突然発生した濃霧に包まれたのです。私たちの船は、ずっと警笛を鳴らしながら、停まっているのとかわりないような速度で進んでました。私たちの船の警笛に答えるべく他の船も警笛を鳴らしていました。かすかに聞こえていた警笛の音がだんだん大きくなり、一隻の船が私たちの船に接近してきているようでした。突然、霧の中から巨大な黒い影が私たちの目の前にあらわれました。船体に書かれたP. マッキンリーという船名が読めるほど、その船は近くを走行していたのです。急角度で舵を切り、P. マッキンリー号が全速力で後進したので、すんでのところで衝突を避けることができました。危機一髪でした。当初の到着予定時刻より、大幅に遅れたことはいうまでもありません。結局、神戸に着いたのは午後2時をまわった頃でした。1926年4月7日、この日が新たな生活の幕開けとなったのです。

神戸ヴィンクラー商会のオットー・ヴェルナーさんが港で出迎えてくれました。6週間を費やした船旅は素晴らしいもので、いざ船を離れるのは名残惜しかったのですが、ヴェルナー氏は私をそのまま事務所に連れていきました。事務所で、上司にあたるフリッツ・ゲンゼン氏とエルンスト・ベーア氏と会しました。二人とも気さくで、この部門の仕事を私の裁量でやってよいと言ってくれたのです。他の従業員は、わら縄のマーケットには疎かったため、この部門は私に一任されることになりました。できるだけ早く英語を習得するようにと言われ、彼らがそのための便宜をはかってくれました。アメリカ人宣教師の家の一室を間借りすることになりました。下宿先は、神戸郊外の夙川で、神戸と大阪間を走る特急の停車駅から15キロほど離れていました。ヴェルナー氏は私を連れて、まず市電で電車の終着駅まで行き、そこから夙川行きの特急に乗りました。ホストファミリーに私を引き合わせると、明朝あらためて、神戸への行き方と仕事の内容を教えると約束し、帰っていきました。このアメリカ人の夫婦には、息子が二人と、5歳になるミリアムという末娘がいました。夕飯は、この家族と一緒に食べていました。一番上の息子がドイツ嫌いな傾向がありましたが、そのことを除けば、いたって気持ちのよい人たちでした。第一次大戦が終わってから8年ほどしか経っていませんでしたから、我々ドイツ人が歓迎されるはずはなく、無理もないことでした。

私が最初に覚えた日本語の単語は、「ノリカエ」（乗り換え）です。ヴィンクラー商会の事務所の近くに行く路線に乗り換えるには、電車の車掌にこの言葉を発しなければならなかったからです。まもなくして、ドイツ人クラブのコンコルディアに出入りし、会員とも顔見知りになりました。このクラブは再建されたばかりだったのです。新しくなった庭の隅石が収められた写真には、私も加わることになりました。神戸レガッタ・アスレチッククラブの会員にも名を連ねました。こちらのクラブでは、ボートを漕いだり、水泳をしたり、またセーリングもし

ました。ハンブルク出身のヘンリー・ヴォーラーと親しくなりました。彼は神戸で五本の指に入るボートの名選手でした。夏になると毎週末、土曜日と日曜日はボートレースが開催されました。ヘンリーは、エルザ２号という名の小型ボートを所有していて、私が彼のクルーを務めるようになり、週末を満喫したものです。

この後の数年間は、私の生涯でもっとも充実した時期といえるかもしれません。雇用主であるヴィンクラー商会とは、三年間の契約を結びました。夙川のキングスベリー一家の下で７ヶ月か８ヶ月ほど暮らした後、同じような独身男二人とともに、俗にいうメスですが、共同生活をするようになりました。私たち三人は、ドイツ料理を心得ている日本人女性をコックとして雇い入れました。彼女には、すべて心置きなく任せることができました。それからしばらくして、私はドイツ製のオートバイを手に入れ、それに乗ってほとんど外国人がいないような田舎にも行きました。ツーリングは最高でした。仲間を連れて釣りにも出掛けたものです。気苦労もなく、気ままで何とも楽しい時間が流れ、日本での生活は充実していました。仕事の方も順調で、私の担当部門の業績は、翌年から上がっていきました。日本人の従業員もよく助けてくれたこから、仕事もはかどりました。仕事以外で知り合う日本人とも親しくなっていきました。何もかもが順調で、毎日が充実していた時期でした。

私は日本的な田舎が大好きでした。藁葺きの屋根が広がる村は見事なものでした。そこの住む人々は穏やかで、木々にはみかんや柿、ビワの木が実っていたのです。美しい竹林の中に、ひっそりと寺院がそびえ立っているのです。メスの仲間であるゲルハルトと二人、神戸の山々の麓の散策を繰り返し、絶景と秘境を見つけたものです。いくら歩き回っても飽き足りないほどでした。私たちは、地元神戸の人でさえ知らないような場所へも足を運びました。バイクを持っている友人二人を連れて、淡路島を一周したこともあります。淡路島は、神戸からさほど遠くはないところにあります。私たちは、琵琶湖の西側沿いから山々に入り、日本海に面した敦賀まで遠出をしました。日本的な田舎の風景に出会えるとなれば、どこへでも足を運びました。富士山にも登り、箱根の温泉にも行きました。宮島、天橋立、和歌の浦と和歌山、紀伊半島、ただただ素晴らしく、古くからある田舎を満喫しました。私の大好きなスポーツ、スキーを楽しむこともできました。ハインツ・ファン・デア・ラーンは、私と同じく独身でしたが、すでに中年という年齢に達していました。ずいぶんと長い間日本で暮らしていて、重鎮のような存在でした。実をいうと、彼は第一次世界大戦時の日本軍の捕虜の一人でした。かつてドイツは、中国大陸の東にある青島という街を一応の軍事拠点としていて、第一次世界大戦が勃発した際、日本軍がこの地を占領したのです。さしたる抵抗を受けることなく、日本軍は占領しました。青島には小規模のドイツ軍の守備隊がいただけで、その守備隊にいた人々が戦時捕虜となり、日本各地の収容所に連行されました。神戸の近くにも収容所がありました。私と親しかったハインツ・ファン・デア・ラーン、トーマス・トルトゼン、パウル・グリーベル、その他の面々は捕虜ではありましたが、近隣の人々と友好的な関係を築いていました。捕虜の一人一人が、手厚くもてなされていたのです。彼らは、どうやら暇を持て余していたようでした。

というのも、多くの捕虜は日本語を学んでいたのです。ハインツ・ファン・デア・ラーンもその一人で、流暢な日本語を話し、読み書きもできました。捕虜として収容されていた間、彼

はドイツ語による日本語の授業をとっていました。私が来日したばかりの頃、日本語の夜間授業の講師はファン・デア・ラーンでした。このクラスでは、彼自身が作成した、ガリ版刷りした教科書を使っていました。ほんの短い間でしたが、私もこの授業に参加し、彼から日本語を学びました。彼は、日本でスキーを広めた功労者でもあります。ファン・デア・ラーンは、単に日本語ができただけではなく、日本について熟知していたのです。ですから、彼のお膳立てによるスキー旅行は見事なものでした。私がスキー狂であることを知った彼は、私と友人のヘンリー・ヴォーラーを連れ、スキーに連れて行ってくれました。ハンブルク出身のヘンリー・ヴォーラーのスキーの腕は素人でした。日本のお正月休みは、元旦から5日までということが多かったのですが、私は上司に嘘をついて、クリスマスから新年にかけての数日を休み、休暇を長くとるように調整していました。旅行に出掛ける1週間前になると、私たち三人は神戸で会し、予定を組み、誰が何を持っていくかなどを打ち合わせました。後のことは、すべてファン・デア・ラーンがやってくれました。まず彼は、乗車券を買い、寝台車を予約しました。目的地の直江津での駅のポーターも手配していたのです。電車を乗り換える際、荷物を運んでもらうためです。宿泊先のホテルに連絡し、予約をとってくれたのも彼です。すべての旅費は彼が支払い、私たち二人は旅行中に財布を出すことはありませんでした。神戸に戻った後、すべての旅費を精算してくれました。準備万全で、まさに時計のような正確さでした。

ポーターは私たちに尽くしてくれましたので、その後の数年間、スキー旅行のたびに同じポーターを手配しました。彼との待ち合わせ場所は敦賀でした。彼と会うのが楽しみで、彼の方も私たちが来るのを心待ちにしていました。私たちはチップを弾んだために、彼は報酬がよい仕事にありつけて有頂天となっていました。赤倉では、ファン・デア・ラーンの名前はよく知られていました。彼のおかげで素晴らしいホテルに泊まることができました。古くからある昔ながらのホテルで、私たちはタワールームのようなところに泊まることになりました。私たちの部屋には、炬燵（炭焼き）があり、何マイルもの長い竹製の管を通じて、温泉水のお湯がホテルに引き込まれていました。

雪に深く覆われた村に小川が流れ、そこから蒸気が上がっていました。快晴が続きました。私たちは、いつも朝方にスキーをすることにしていました。当時、今ほど多くのスキーヤーはいませんでした。ただ、その後何年かのうちに増えることになりましたが。スキーヤーの多くは、日本人の大学生で、彼らともすっかり打ち解け、賑やかな旅となりました。スキー旅行といえば、私たちは日本の寺に泊まったこともありました。大正天皇が亡くなり、寺の太鼓と神社の祭司による詠唱が夜通し響き渡り、喪に服した後、新しい天皇として裕仁が即位しました。この回想をしているちょうど今この時、東京では裕仁の葬儀が行われています。1926年に彼が即位したその日、折しも私はスキー旅行に出掛けていて、寺に泊まっていました。あれから62年間、彼は天皇の地位にありました。そんなわけで、この旅行のことは昭和天皇と結びつけて思い出さざるをえないのです。ファン・デア・ラーンとの年末のスキー旅行は、その年のハイライトでした。私たちは、乗鞍の山をスキーで登りました。ファン・デア・ラーンが手配してくれたポーターは、ずっしりとしたリュックサックを運んでくれました。私たちは、日本のスキー小屋を泊まり歩きました。朝方のまっさらな深雪、時には吹雪にも遭遇しました。凍える

ほどの寒さも経験しましたが、冒険心を掻き立てられました。生涯の思い出となるような旅でした。

私が神戸に来てまもなく、オットー・パウレンカというドレスデン出身の若者がもう一人、ヴィンクラー商会の構成員に加わりました。彼ともう一人、ハイネという名前の若者と私、この三人で聖なる島の宮島へ行ったことがあります。この宮島への旅行は、1927年のことで、桜の季節でした。午後5時、神戸を出航する小型の沿岸汽船に乗り、翌日の午後に宮島に着きました。宮島に着くまでの間、いくつもの小さな港に停まり、乗客を降ろし、新たな乗客を乗せ、貨物の交換、積み下ろしがありました。いくつもの小さい島々を通ったのです。素晴らしい旅で、その後所帯を持って、日本で暮らすようになった頃、妻のハンニと息子のボブには、この旅行のことを繰り返し話して聞かせたほどです。それくらい、私にとってかけがえのない思い出となりました。『蝶々夫人』などの作品にも描かれているように、宮島は、海に浮かぶ神社がある小さな島で、誰もが憧れる日本の姿そのものでした。満潮時になると、水面ぎりぎりのところに神社が浮いているかのように見え、また水中から大きな赤い鳥居（神社の門）が顔を出しているのです。島のいたるところに、穏やかで従順な鹿がいて、かわいらしい茶屋が何軒かあり、桜が咲いていて、日が暮れると紙の壁（障子）を通して歌が聞こえてくるのです。幻想的な美しさでした。日本の民宿に泊まりましたが、私たち三人とも、片言の日本語しか話せませんでした。この民宿では、こんなことがありました。私たちは、朝食に何が食べたいかと聞かれたので、一人二個の卵と決め、三人分で六個の卵が欲しいと伝えたのです。驚いたことに、翌朝の朝食では、一人六個、三人で18個の卵が出されていたのです。日本人にしてみれば、大柄の外国人であるから、一人二個の卵では足りず、六個くらい平らげると思ったようです。何とか三人で、出された分の食事を胃に収めたように記憶しています。

週末になると、神戸レガッタクラブに仲間で集ったものです。毎春と毎秋、クラブではボートレースの大会が開催されました。私はドイツチームの一つに名前を連ねていて、4人チームで何度か優勝しました。仲間のヘンリー・ヴォーラースとチームを組み、すさまじい接戦の末、優勝したことがあります。試合の後、トロフィーの授与が行われた際、クラブ史上かつてないほど緊迫した試合だったという賛辞が呈されました。それから数年間、私たちのチームはいくつもの大会で優勝し、記録を更新しました。数いたボート選手の中で、私は要となり、コーチはハンブルク出身のグロンビックという男でした。彼はその後有名人、いや悪名高い人物として名を馳せることになります。このグロンビックについては、二度目の日本滞在となる1934年以降の話の中で、また取り上げることにします。次のシーズンでは、私自身がこのチームのキャプテンを務めることになりました。ドイツ人の中には、休暇で帰国する者もいました。ウーレンホルストもその1人で、休暇で家を空ける間、彼のボートでセーリングしたいかと私に聞いてくれたのです。もちろん私は、「イエス」と即答しました。考えるまでもありませんでした。キャプテンだった私は、何度か身の毛がよだつような危険な目にあい、大怪我をしなかったのが不思議なくらいです。そんなこんなで、とうとう私はチームを勝利へと導きました。今思い起こしても、奇跡のような優勝です。

先ほど少し触れたように、私が担当していた仕事はうまくいっていました。日本人スタッフの名前も挙げておく必要があるでしょう。番頭と呼ばれていた上司は、ナカハマという名前の年配の男性です。彼の家を何度か訪ねたことがありますが、とても温かい家族でした。独身だった私は、家事まで手が回らないこともありましたが、そんな時に手を差し伸べてくれました。彼の他には、アカギさんとアサガワさんという若い従業員がいて、この二人もよく助けてくれました。彼らとの友情は死ぬまで続くでしょう。彼ら日本人スタッフは、公私ともども世話を焼いてくれました。私が充実した毎日を送ることができたのも、これらのスタッフが支えてくれたおかげです。

ヴィンクラー商会で働いていた時、他の部署のマネージャーの一人が休暇をとることになり、その間、彼の仕事を担当できないかと頼まれたことがありました。合意の上で、オットー・ベアーの部署の仕事を引き継ぐことになりました。彼の部署は、雑貨、骨董品、ボタン、貝殻、竹などを取り扱っていて、私がそれを引き受けることとなったのです。私なりに努力し、新しい経験を積むことができたので満足していました。ヴィンクラー商会での3年の契約期間が過ぎた後、何ヶ月か契約を延長しました。ハイネの担当するコットン部門の仕事を引き継いで欲しいと頼まれたのです。ベアの時と同じく、この会社側の申し出を受けることにしました。コットン部門は、忙しさという点では、この商会の中で五本の指に入っていたでしょう。

綿布は、世界中へ出荷されていて、我が社はいたるところに代理店を設置していました。特筆すべきことですが、南米の国々には、それぞれの都市に一店舗ずつ仲介業者を設置していました。ベネズエラ、コロンビア、アルゼンチンのブエノスアイレス、チリなどがそうでした。アフリカも同じで、南アフリカのケープタウンとヨハネスブルグには、ルイ・ド・ルー（Luis de Lue） という仲介業者がいました。モザンビークのアクラにも、仲介業者がいたのです。もちろんイタリアなど、ヨーロッパの国々もそうでした。北米の拠点は、ニューヨークです。このように世界中を網羅していたのです。この時代、まだ航空便がなかったことを考慮に入れなければなりません。すべての郵便物は、船便で出荷されていたので、目的地に着くまでに数週または数ヶ月間を要していたのです。取引は、もっぱら電信網を通じてなされていました。ヴィンクラー商会には、大所帯の電信部門がありました。毎朝、世界中から電報がここに届き、解読がなされていました。その後、この電信送金を通じて、私自身が担当した取引の分け前を受け取るようになりました。仕事はおもしろく、業績も上々でした。

神戸にいた3年半の間、毎週欠かさず、両親や友人にせっせと手紙を書いていたことも付け加えておきます。もちろんクリスマスには、さらに多くの友人に向け、ドイツへせっせと手紙を送りました。そして家族や友人から、毎週のように返信の手紙が届きました。手紙を書くのは母の役目で、母や友人からの手紙を受けとることが毎週のハイライトだったのです。事務所の私のデスクの上に、故郷から届いた手紙が並べられていると、休暇のような気分に浸れたものです。

三年半に及ぶ神戸滞在に終止符を打ち、ドイツへ戻ることに決めました。ただ私は、どこかを経由してドイツへ帰るつもりでいたのです。両親の後押しもあり、まず神戸からマニラまで行く船を予約しました。さらにフィリピンを南下し、木曜島からオーストラリアを目指しまし

た。最初の寄航港はブリスベンで、その後シドニーに停泊しました。シドニーに着いたのは、1929年の末頃でした。シドニーから出航して、クリスマスから新年にかけてニューカレドニアとフィジー島を周遊する旅客船があると知りました。Miraki という名前の古いボートでした。早速このボートを予約し、旅を満喫しました。相当数の新婚旅行客がおり、船はニューカレドニアのヌメアに停泊しました。ヌメアで、同じ船に乗り合わせたフランス人男性と親しくなりました。彼はピエール（苗字は忘れてしまいました）という名前でした。フィジーのスバに着く頃には、すっかり打ち解け、何度か一緒に出掛けました。スバで、私は別の船に乗り換えなければなりませんでした。次に出航する便は、マトソン・ラインのシエラ号で、アメリカ領サモアで停泊し、そこからホノルル、ハワイへと向かいました。この船で、オーストラリア人の女性三人組と知り合いました。三人とも教師をしていて、休暇でハワイへ行くところでした。スポーツが得意で、賑やかな船旅となりました。彼女らは、私のアクセントやオー、ジー（oh gee）などの表現をからかっていました。私の口癖だったらしいのです。ハワイを離れ、私一人になった後、電報を受け取りました。その電報には、「ボン・ヴォヤージュ、オージー、オーストラリアの娘たち」と書かれており、この一言一句をいまだに覚えています。いろいろな出会いがあった船旅でしたが、それから先は一人で、一路サンフランシスコに向かいました。サンフランシスコでは、ヴィンクラー商会の同僚に会い、一両日ほど彼らのところに厄介になりました。そしてサンフランシスコから大陸を横断しました。まず、お気に入りのヨセミテ国立公園に行きました。冬だったので、閑散としていましたが、その美しさは心の琴線に触れました。そこからグランドキャニオンに向かい、ナイアガラの滝を通り、ようやく東海岸にたどり着きました。ナイアガラの滝では、ただただ寒いという言葉が口をついて出てきて、雪の中でひどい風邪を引いてしまいました。さらにニューヨークに向かい、そこからブルーリボンライナーが運行しているかのブレーメン号に乗り、ハンブルク、ドレスデンへと向かいました。ドレスデンに着いたのは、1930年2月でした。

そろそろ、私の人生を大きく変えた出来事について話を進めた方がよいでしょう。日本にいた頃、おそらく1927年だったと思いますが、I・Gファルベンの構成員で、ヴィリー・ジュディツェという名前の若者と親しくなりました。彼はある日、私のところ来て、休暇を使って近々ドイツに帰国することを伝えました。彼の両親もドレスデンに住んでいるということで、ドレスデンにいる間、私の両親のところに挨拶に出向き、日本での私の暮らしぶりなどを伝えておこうかと申し出てくれたのです。願ってもないことでした。私の両親は、神戸から来た人から息子である私の近況を聞くのを楽しみにしていたのです。彼はドレスデンに着くやいなや、私の両親を挨拶がてら訪ねたのです。会話の流れから、彼の両親と二人の姉妹について話題が及びました。彼の家族も、私の実家から遠くないところに住んでいたのですが、ドレスデンに越して来て間もないことから、なかなか知り合いができないと母に言ったようです。私の母は、毎火曜日に若い人を集めて、賭け事や歌を楽しんでおり、もっぱら我が家が会場となっていました。もちろん母は、「妹さんたちに我が家へ遊びに来るように伝えて。ぜひ彼女らにも加わっていただきたいわ」とヴィリーに言付けたのです。母の言葉通りとなりました。火曜日になると、ジュディツェ姉妹のグレーテとハンニは我が家にやって来て、社交の輪の中に入り、す

っかり打ち解けて、和気あいあいと過ごしていました。私がドレスデンに着いた2月、我が家に集っていた若者が皆で待ち構え、私が家の玄関の扉を開けた途端、「お帰り」と歓呼してくれました。ホールの化粧台の上にセーラー服を纏ったかわいらしい少女が腰掛けていて、旗を振って迎えてくれたのです。私はまっすぐ彼女のもとに行き、「あなたがハンニ・ジュディツェさんですね」と言い、彼女を抱き上げてそこから下ろしたのです。そして1年後、何が起こったかといえば、私たちは結婚しました。あれから58年、私たちは今に至ります。

帰国後しばらくの間、父の商売を手伝っていましたが、景気は芳しくはありませんでした。日本や中国、その他の国々から商品を輸入するための外貨が足りず、期待していたほどの仕事が振ってこなかったのです。新しい顧客を探し集めようと、ドイツ中を奔走しました。出張の甲斐はありましたが、目標とは程遠く、好調とは言い難いものでした。ハンニと私は1931年4月に結婚し、息子のボブは、1933年10月に生まれました。1933年初旬、ヒトラーが権力を掌握しました。折に触れて、ヴィンクラー商会の神戸支社から手紙や使者が来て、神戸支社に戻り、かつていた部署に復帰して欲しいという申し出がありました。父の事業から手を引くのがいやで、二の足を踏んでいましたが、景気は悪いままで、良くなる兆しもありませんでした。

ヒトラーの時代の新しい法律により、ドレスデンのボートクラブを退会しなければなりませんでした。暗雲が垂れ込んでいるかのようで、不吉なことが待ち受けているようでした。ヴィンクラー商会と5年間の契約を結び、もう一度日本へ行くことにしました。日本には、楽しい思い出が詰まっていましたから。こうして神戸支社の申し出を受けることを決めたのです。家族の笑顔にあふれた、新しい生活が待ち受けているようでした。日本で独身時代を過ごしましたが、日本はとても暮らしやすいところで、家族と一緒に楽しくやっていけるだろうと胸を膨らませました。神戸で働く決心を固め、私は1934年5月末、ドレスデンを発ちました。床の敷物を取り扱う会社があり、このカーペット輸入業者が、日本で事業を展開することから、私はニューヨーク経由の日本行きを命じられました。ヴィンクラー商会は、この事業に手を広げようとしており、私が責任者になることになりました。ニューヨークでは、メリソン社と顧客を訪ね、この事業に携わっている人々と懇意になっておくように言われていました。当時のメイソン社は、ラグマットやカーペットの輸入業者としては米国最大の規模を誇り、本社はニューヨーク五番街、エンパイアー・ステイト・ビルの向かい側にありました。私の訪問を歓迎してくれました。彼らの親切な対応に感銘を受けました。